

平塚らいてうの会ニュース

2018年の新しい課題

「平和」と「自然」の豊かな世界を

NPO法人平塚らいてうの会会長 米田佐代子

『平塚らいてうの会ニュース』は100号に

あたらしい年とともに、このニュースも1992年に前身の『平塚らいてうを記念する会ニュース』として発刊されて以来100号の節目を迎えました。会が記念碑建立や記録映画制作に協力し、2001年にNPO法人平塚らいてうの会になってから「らいてうの家」をオープンして多彩な活動に取り組んできた貴重な記録紙です。第1号から80号まではウィメンズ・アクション・ネットワーク(WAN)のミニコミ図書館に収録され、公開されていますのでご覧ください(van.or.jp)。

21世紀の希望はどこに？

21世紀が始まるとき、わたしたちは「戦争の20世紀を越えて、21世紀こそ平和を」と語り合いましたが、大国の利害による武力介入は今も止むことがありません。らいてう生涯のねがいであった「どの国も敵とせず、ただ戦争だけが敵」となる平和世界への希望はどこへ行つたのでしょうか。

けれどもらいてうは、どんなときにも失望せず、「ほんとうの平和をつくる」女性の力に希望を託

しました。戦時中迷い悩んだらいてうは、戦後深い反省とともに「かつて女性は無権利だったが今は主権者。こんど戦争になったら女性の責任」と自覚して、平和運動の先頭に立ったのです。

核兵器禁止条約採択にみる

「女性がつくる平和」の可能性

2017年7月、国連で核兵器禁止条約が採択されたとき、日本の被爆者をはじめ多くの女性が重要な役割を果たしました。推進役としてノーベル平和賞を受賞した「核兵器廃絶国際キャンペーン」(ICAN)参加団体の一つ「婦人国際平和自由連盟」(WILPF)は第一次大戦当時から活動、成瀬仁蔵によって日本にも紹介され、らいてうが影響を受けたジェーン・アダムズ(初代会長)は1931年ノーベル平和賞の受賞者です。「女性のイニシアティブ」は平和をつくるカギなのです。2月のらいてう講座にぜひご参加ください。(※)

「自然とともにある平和」を

太陽光発電問題の新展開

らいてうの家の太陽光発電問題は、わたしたちの運動で当初予定した昨年4月には着工できず、昨年11月2日の説明会では、事業者(HJアセツト・マネージメント社)の依頼を受けたアセス担

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626



当の地域づくり工房が「この地の自然と歴史・文化を守ってきた関係者」に配慮して、「設置しない」代替案(ゼロ提案)を含む「中間評価書案」を提示、異例の展開となりました。しかしHJ社は「法的には可能」と強行の構えです。

地域づくり工房はこの

案に対する意見を公募、それをもとに公開の「ワークシヨップ」をおこなって「評価書」をまとめる予定です。すでに会としての意見とともに、多くの会員が意見を送りました。この「ゼロ提案」を手掛かりに、事業者とも地域の人びとも、行政とも話し合い、この地を「自然のいのちの営みを守る平和のひろば」として育てる途を拓きたい。今年は「白紙撤回」の正念場です。

「太陽光発電計画白紙撤回署名」は地元の自治会や県内のみならず、全国各地から続々届いています。1月以降「ゼロ提案」をめぐる、さらに事業者側と話し合う方向になったので、署名活動は続行します。引き続きご協力ください。(※)

※らいてう講座2018

2月3日(土) 午後2時 東京ウィメンズプラザ 講演「女性のつくる平和社会―核兵器禁止条約をめぐる―」川田忠明さん (別紙チラシ)

※署名 用紙は会のホームページから。郵送ご希望の方は会にファクス、メールでご連絡を。

祝100号 らいてうの会に深く関わってくださった方々に「ひとこと」お言葉を寄せていただきました。

伝えること

宮島満里子



伝えるという地味な営みが歴史を創出する。らいてうの会のニュースが全国に伝えられて、百号百歳である。「らいてうの家」がある。

ずまや高原に誕生して十年の歳月を経た。そこで素晴らしい先達方との出逢いがあり、自然の中で本音で語り合える時間を共有できたことは、最晩年に戴けた生涯の宝物である。

偶像のように仰いでいた「らいてうさん」が最も身近な存在として、上田の地に舞い降りたとは思えないほど、今は親しみをもって呼ぶことができる。図らずも「源氏物語」をこの家で語らせてもらうことになった。物語に登場する女たちの生き様のなかに込められた紫式部の内心を、お喋りできる願望が叶えられたのである。千年を経て今なお式部のメッセージが伝えられる、最高の環境をここは提供してくれる。まさに「らいてうの家」であるからと言いたい。

会の事業と活動は「事務局日誌」の欄を見ると着実な歩みが見えてくる。「平塚らいてうの会ニュース」が次の百号に続くように切に祈っている。

らいてうさんにお会いしたかった！

日色ともゑ



「平塚らいてうの会ニュース」100号、おめでとうございます。

70年代のはじめごろ、新婦人しんぶんの依頼で「この道ひとすじに」という紙面を受けもったことがあります。無事終わった時、編集長から「一年間良い仕事をしてくれましたね」とらいてうさんが言ってくくださったとの言葉をそえて、おどろきのプレゼントがありました。らいてうさんの色紙です。

その後は、ご縁があり「山本安英の勉強会」では「元始、女性は太陽であった」の朗読や櫛田ふきさんからは「憲法を守りぬく覚悟」を読んでも声をかけていただいたり、私はらいてうさんの文章で学ばせていただきました。あの時「らいてうさんにお会いしたい」と強く願ったら、実現したでしょうか……

皆さんの努力で100号が迎えられましたことは素晴らしいことと思っています。会員でいることを誇りに思っています。

新しい年にあたって

中島 邦

賀春 戦争への道を平和への道に

きりかえる年にしましょう



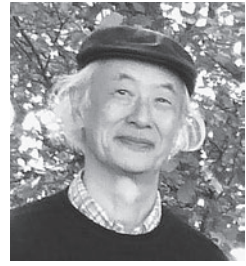
平塚らいてうは1966年元旦にあたって右のようなメッセージを送っている。他にも年賀状はいくつかみられるが、いずれも平和を希求する言葉が入っている。

50年余を経た今も未だに同様に主張せざるを得ない日本の現状がある。同時に世界への警告としても発せざるを得ないといえよう。

らいてうの戦後の発言や活動はその生涯を通して蓄積された結果に他ならない。日本女子大学の学生であった若き日に、創立者の成瀬仁蔵による人格教育の方針によって自らをみつめ、高めることに触発され、さらに禅に出合い見性を得た。見性とは他者によって承認されるものではなく、自らが確信するものであり在学中にそれは得られたとみたい。以来、禅を通じて自らをとぎすます事を自らに課してその時々社会に真摯に発言し行動を重ねてきている。それ故にらいてうの生涯は検討に価する魅力あるものといえよう。

平塚らいてうの思い

奥村直史



「自己本来の面目とは？」に込めて「草木や昆虫や鳥獸などと同じように、この宇宙に遍満して生きとし生けるものを生み育てている大きな『いのち』

の力によって、生み出された：生き通しのいのちである自分自身である」と1947年61歳のらいてうは記している。こうした自己認識、世界認識は、20歳の「見性」以来終世変わらなかった。

1911年25歳のらいてうは『青鞥』創刊号に「自己」の覚醒を訴えて以後、共同生活、出産、育児をはじめとした社会的体験を重ねる中で次々に発見し確認した思いを表明し世に問うてきた。「母性」を尊重し、「軍縮・平和」を希求し、「世界民」「宇宙民」たらんとし、「相互扶助」社会の建設を目指したのである。

「平塚らいてうの会・らいてうの家」では、らいてうの提起した思いを確認し、その思想を学ぶとともに、母子を含め人びとが集い交流する場を作ってきた。今日「らいてうの家」に集う者を根本で支える『自然・いのち』がメガソーラーによって浸食されようとしている。らいてうが描いた自然観、世界観に学ぼうとするかぎり、当然反対せざるを得ない。

我々の活動を支えてくれる会報が100号以後も十分に力を発揮することを願っております。

講談・平塚らいてう

宝井琴桜



連続講談となった。

大衆演芸である講談で、平塚らいてうを取り上げたのは、らいてう没後20年の1991年のこと。とても一席では語りつくせず結局、6年半かけて19作の

初回のプログラムには「らいてう」を語り大きく豊かな女性に成長したい、これは私のライフワークですと書いた。以来、機会あるごとに語ってきたがどうしてもドラマチックな前半生に偏りがちになっている。塩原心中未遂事件や『青鞥』誕生は講談の話芸で語りやすいということもある。内面の思想を物語で話すのはとても難しい。そこを何とか突き詰めてみたい又、らいてうを通じて憲法や平和を訴えたいと思って去年から又、連続で取り組むこととした。

年に3回程度の「かぶら矢会」。国立演芸場で催されるこの会は、気のあう仲間6人の勉強会で女は私一人。お客様も圧倒的に男性が多い。らいてうと言っても初めて聞くという人もいる。そういう場で受け入れてもらえるのか不安もあったが、今では「続きが楽しみです」と言ってくださる男性もでてきた。19作全部は無理だが凝縮させて続けてみようと思っている。

「平塚らいてうの会ニュース」を頼りにして。講談「かぶら矢会」3月27日・7月9日
問い合わせは 03・3915・4753（琴調）

100号に寄せて

野末悦子



「平塚らいてうの会ニュース100号」おめでとうございます。

「元始、女性は大陽であった」で始まる『青鞥』の創刊のフレーズに大感

激した私でした。昭和になって生を受けた私にとって、明治から大正そして戦争に突入してしまつた昭和の変遷の中で先人のことをもっと知りたいと、らいてうの著書を探し求め、川崎市立の図書館で4冊の自伝に巡り合うことができました。

『わたくしの歩いた道』昭和30年3月5日新評論社刊と『元始、女性は大陽であった 下巻』1971年9月6日大月書店刊、『続 元始、女性は大陽であった』1972年11月4日大月書店刊、『元始、女性は大陽であった』（完結編）1973年1月16日発行でした。ということとは下巻の前のもう一冊が貸し出し中で今回は手にすることが出来なかったわけです。その時期の内容はおそらく新評論社刊の前半に書かれてあることで理解できるのではと思われました。またの日に図書館を訪れるときに巡り合えると思います。その時期は、彼女が禅の修行に没頭していた時期と思われる。

戦後の高揚期の活躍の中に櫛田ふきさんのお顔が見られたのも、身近に感じられて嬉しく存じました。新しい憲法への喜びが強く表されていたのも、心強いことでした。

ニュース100号記念

これまでの活動を振り返って

11月16日、長く事務局長をつとめてこられた小林明子さんと、創立当初から会に深く関わっている折井美耶子副会長に、これまでの会の活動について語っていただきました。

「平塚らいてうをしのぶ展」と碑の建立

折井 1971年5月にらいてうが亡くなり、翌年、「平塚らいてうをしのぶ展」が神戸、大阪、京都で行われました。86年に東京の日仏会館で行



創刊当時のニュースを前にして、小林明子さん（左）と折井美耶子さん

われた「らいてう生誕100年祭」には全国から集まり、会場からあふれるほどでした。長岡輝子さんが詩「新しい女」を朗読、大岡昇平さんと丸岡秀子さんが講演され、印象深いものでした。

91年には「没後20年・『青鞥』創刊80年記念のつどい」が千代田公会堂で開催され、その後、「平塚らいてうを記念する会」が発足したのです。

小林 「記念する会」の設立総会は92年5月に損保会館で行われました。100人が集まり、会長は櫛田ふきさん、事務局長は立松隆子さんでした。
折井 立松さんと静岡で行われた日本母親大会

で、らいてうのうちわを売って資金を集めたことを覚えています。

『婦民新聞』の編集をしていた塩谷満枝さんが、長いこと会のニュースを担当してくれました。写真も撮り、読ませる記事も書く名編集長でした。ね。事務局長は白井雅子さんが婦団連と兼務でつとめてくれました。

折井 奥村家の知り合いが茅ヶ崎にいて「茅ヶ崎らいてうの会」や市議や地元の方々とは協働しながら市立高砂緑地公園に碑を立てました。碑は、南湖院に行く途中にあります。櫛田さん、小林登美枝さんと何度も茅ヶ崎に通い、石も探しました。98年5月23日に碑が建立され、瀬戸内寂聴さん、宝井琴桜さん、築添正生さんも来てくれらいてうの曾孫の奥村ともさんが除幕をしました。

小林 2000年に「記念する会」から「NPO平塚らいてうの会」に名称変更し、設立総会で会長は櫛田ふきさん、私は事務局長になりました。

「平塚らいてうの記録映画をつくる会」始動

折井 櫛田さんの白寿の会（1998年）には岩波ホールの高野悦子さん、映画監督の山田洋次さんがいらしてくれました。櫛田さんが「らいてうの映像が欲しい」と言うのと山田さんが「映画に決まってる」と。そこで「羽田澄子さんにやつてもらおう」という高野さんの一声で決まったのです。

羽田さんは映画を撮る決意をすると「内容は一任してください」と言われ、私たちはお金集めに奔走しました。「平塚らいてうの記録映画をつくる会」は、「らいてうの会」と日本女子大の「平塚らいてう研究会」と「らいてう研究会」が中心

となりました。

小林 ここから日本女子大との関わりが深くなっていききましたね。記録映画が完成すると2002年に岩波ホールでロードショー、長野県をスタートに全国で上映運動が始まりました。真田だけでチケットが600枚売れたのには驚きました。

折井 各地で上映運動を行って黒字になり、そのお金が「らいてう賞」と「らいてうの家」の基金となりました。

信州真田に「らいてうの家」を建てる

折井 りいてうが買い求めた長野県の土地を奥村家が下さるというので、1996年に土地を見に菅平のペンションの人の案内で、登美枝さんと数人で行きましたが、土地の状況がよくわかませんでした。らいてうの遺品は関西の「働く婦人の家」が預かっていました。

小林 2000年6月らいてう忌で、あずまや高原にバス旅行に行き、家が建つ場所を参加者で見ました。それが『信濃毎日新聞』に載り地元の方々はいいよ家が建つと実感したそうです。

土地をいただくにはNPOにしなくてはならないので、同年9月の臨時総会から作業を始め、定款案をもって東京都に申請すると、個人をたたえる会は駄目と。臨時総会を開いて名称変更し認可される前に櫛田さんが亡くなってしまいました。

再度臨時総会を開き、小林登美枝さんが会長になり、2001年6月にやっと認証書が届きました。

折井 不動産をもつのは大変なことです。2004年に登美枝さんが亡くなってから1年間は会長不在で、その後、米田佐代子さんが会長に

なりましたが、事務局長の小林明子さんの尽力は本当に大きいです。

小林 土地問題が落ち着くと、家を建てるための「プロジェクト会議」をつくりました。地元的设计者「女性九人衆」と中央設計の永橋為成さんに相談し、全国から寄せられた「提案カード」も参考にしながらいきましました。2003年末、全国に訴えるための呼びかけ人をお願いを出すことになったのですが、登美枝さんはホスピスに入っていて、暮れに書いた文章が絶筆となりました。登美枝さんはさぞ心残りだったでしょう。

折井 木造で、しかも長野県産の地元材を使い、家具も全部木で作っていただきました。大黒柱は真田町傍陽の木です。デザインをお願いした小田原健さんに様々な意見を言って、展示ケースも木造にしてもらったことには本当に感謝しています。

小林 家建設の募金は目標の5000万円を超えました。山崎一彦さんがステンドグラスを作成してくれました。2つのペレットストーブは、寄贈してもらったものです。長野県産の木を使ったお返しに植林もしました。庭を広げてチップをまいて踏み固めて歩けるようになりました。

折井 笹狩りをしたら白樺の木が出てきたのには驚きましたね。それまでは身の丈ほどのクマザサに覆われて見えなかったのです。

2014年にはスウェーデンに「エレン・ケイの足跡を訪ねる旅」に行きました。25人が参加し、エレン・ケイ記念館とらいてうの家は姉妹館となりました。ストックホルムにエレン・ケイ公園があり彼女の銅像があります。現地の高見さん

にガイドしてもらったのも、とても良かったです。これからの課題——後継者をどう育てるか

小林 NPOになって16年、家ができて11年が経ち、これからも地域と一緒に活動を続けていきたいですね。課題は後継者をどう育てていくかです。（聞き手・金輪きみ子 文・飯村しのぶ）

森のめぐみ講座Ⅱ 2017・10月1、2日

1日目 笹狩りは、1年ぶり2回目の参加です。今回は、らいてうの家の前庭で昼食準備組と笹刈り組との顔合わせから始まりました。身支度を整えて、らいてうの森に歩いて行きました。草刈り鎌で、熊笹を刈って行くのは、なかなか骨が折れますが、木に囲まれての作業は、楽しくもあります。大きく育って、トゲがいっぱいになったウドやタラとも格闘していい汗をかきました。

前回と比べ、植樹した木々が随分大きくなっています、一部は密集して育っていました。実験的に間隔を空けずに植樹したところだそうです。もうすぐ、本当に「らいてうの森」が出来上がるということを実感しました。



お昼は、きのこの炊き込みご飯、きのこの汁、炭火で焼いた天然イワナ、地元の方が持ち寄ってくださった

煮物や漬物がいっぱい。おしゃべりしながら美味しくいただきました。

午後は、鹿よけの薬を塗り終えた後、一面にベニバナイチャクソウがピンク色の花をつける場所や、朝鮮五味子の赤い実のあるところを散策しました。ミヤマリンドウも可愛く咲いてました。

2日目 露天風呂からの素晴らしい朝焼けに、背中を押されて、早朝6時半から、散歩に出かけました。ふかふかの森の散歩道を1時間歩きまわりました。朝鮮五味子を見つけては、収穫。一粒食べてみると、本当に甘い、辛い、苦い、酸っぱい、しよっぱいの5つの味が口に広がりました。焼酎につけると綺麗な赤いお酒が出来上がります。

9時から、自然観察指導員の西牧さんと森に入りました。はじめは全く見つけられなかったのに、目が慣れてくると落ち葉の間にひっそり隠れているきのこが目がいくようになってきました。クリフウセンダケ、ナラダケ、ハナイグチダケを袋いっぱい採取することができました。圧巻は、ミズナラの大木にびっしりくっついていたマスタケでした。魚のサクラマスに色がそっくりだということのきのこも採取しました。大収穫の1日でした。東京に帰ってから、塩水で汚れを落としたり、ピカピカに綺麗になり、思わず絵を描きました。そして、佃煮、きのこの汁、湯豆腐の付け合わせにしました。マスタケは、バター焼きが合うという話でしたが、野菜や、豆と一緒に洋風スープにしました。角切りのハムのようにでした。秋の森のめぐみ、ごちそうさまでした！

（北澤有希子）

「中西悟堂とその仲間たち」展にらいてう登場



金沢市の金沢ふるさと偉人館で2017年4月22日から8月27日まで「中西悟堂とその仲間たち」展が開催されました。金沢は中西悟堂生誕の地であり、中西悟堂に関する多くの資料が所蔵されています。なかなか都合がつかず、最終日に何とか日帰りで訪れることができました。展示コーナーに入ると正面のメ

インスペースに、らいてうと悟堂さんが二人で本を見る写真が大きく展示されているのにまず驚きました。

中西悟堂（1895～1984）は、禅僧、詩人であり、1934年（昭和9年）に日本野鳥の会を設立し、戦前戦後を通して自然保護の運動に力を尽くし「自然」（じねん）を追求する思想家でした。今回の展示には、らいてうの他に柳田国男、斎藤茂吉、水原秋櫻子、佐藤春夫等々の著名な50人の文化人が紹介されましたが、らいてうが大きく展示されているのを目の当たりにして、二人の同志的なつながりの深さを改めて思ったことでした。新たに発見されたらいてうの手紙も展示されていて今後の調査をお願いし帰途につきました。

（三留弥生）

「命短し 恋せよ乙女」展17・7／159／24

弥生美術館（東京都文京区弥生町）のチラシに「カリスマ女優・松井須磨子の後追い自殺、世界的な物理学者を誘惑、失墜させたと言われた原阿佐緒」などありますが、大正時代は世の中を賑わせた恋愛事件が多かったのでしょうか。弥生美術館に行ってきました。

「らいてう」をどのように取り上げているのかと興味津々。入ってすぐ左側にかんりのスペースをとって、らいてうと奥村博史の出会い、愛を育み、そして子育ての時代、らいてうの手紙や当時の雑誌などが展示してありました。今までにない企画で、与謝野晶子と鉄幹、柳原白蓮と宮崎竜介、長沼智恵子と高村光太郎など、一味変わった興味を引く企画で、女性にとって明治の重苦しさを通り抜けた、明るさと新しさと自立を感じさせる大正時代が展示してありました。

先日NHKのEテレ「グレーテルのかまど」で「平塚らいてうのゴマじるこ」という番組がありました。ご覧になりましたか？

博史とらいてうの愛のゴマじるこ、「オニキスのように黒く艶やかなとっておきのスイーツ、ゴマじるこ」の作り方を丁寧に解説していました。「ゴマじるこの作り方」は『美しい暮しの手帖』（第4号 1949年7月）に掲載されています。

昨年、習志野で平塚らいてうに関する講座があり、裏方で男性メンバー数人が美味しいゴマじるこをつくり、参加者みんなにふるまってくれました。おいしい講座もいいですね。

（井上美穂子）

【事務局日誌】

9月26日 地域づくり工房と意見交換会（於らいてうの家）

10月1日 森のめぐみ講座Ⅱ「らいてうの森」の笹刈り、鹿よけの薬を塗布

10月2日 秋の恵みにふれて 秋の恵み採取

10月5日 ブックレット編集会議

10月12日 らいてうの会ニュース拡大編集会議

10月15日 第2回常任理事会

10月20日 「上田市の赤ちゃん政策」講師・太安ヒデ子さん（於らいてうの家）

10月24日 「木村康子さんをしのぶ会」参加（於エデュカス東京）

11月2日 HJアセット社から4人来局 太陽光発電所住民説明会参加（於上田駅前ビル パレオ）

11月6日 グレーテルのかまど「平塚らいてうのゴマじるこ」Eテレ放映

11月7・8日 「らいてうの家」大掃除・反省会

11月9日 展示収納作業 「家」閉館

11月14日 ブックレット編集会議

11月16日 第4回理事会

12月12日 折井美耶子さん、小林明子さんへ100号ニュースの為インタビュー

ブックレット編集会議

第3回常任理事会

今年（2／26）のスノーシューは、菅平高原を歩きます。詳しくは事務局へお問い合わせください。